

一級河川利根川水系八ッ場ダム建設工事に係る公聴会における公述の申出書

浅間山の火山活動が吾妻川・利根川流域に及ぼした影響について、20年ほど調査・研究してきた立場から、吾妻溪谷（八ッ場地区）にダムを建設する合理性を説明した裏付け資料の不備と問題点、湛水により起こりうる応桑岩層なだれ堆積物（応桑層：OkDA）への影響、引き起こされる土砂災害の想定とこれに対する対策案の不備、さらに従前に提出した内陸地震に伴う過去の土砂災害履歴の認識と対策、浅間山・草津白根山の活動履歴からの指摘内容について国交省に質疑を求めます。

- 1 八ッ場ダムの堆砂量試算の問題点と意図的情報操作（不正）について
- 2 大規模な土砂移動に伴い発生した「天然ダムや土砂ダム」で、国交省河川部門が実施してきた最も有効な基本対策（土砂災害防止策）について、1つのみ回答を求めます
- 3 応桑岩層なだれ堆積物（略称：応桑層 OkDA）流下直前の浅間山の噴出物についての認識の有無
- 4 応桑層（OkDA）の特性把握のため実施した「水浸変形実験の結果」とこれに伴う「3つの防災対策」の基本的不備について
- 5 応桑層（OkDA）流下に伴う影響 ⇒ 複数の層位で形成されている地すべり面の存在と認識について
- 6 3.11.タスクフォース報告書と民主党【八ッ場ダム問題に関する部門意見】に対する国交省の考え方（平成23年12月12日作成）に見る【報告・回答】の不備について
■国交省の報告した応桑岩層なだれ堆積物（OkDA）について見解を述べた専門家（OkDAの研究実績・発表・論文などがある人物）とは、どのような方ですか。ご教示ください
- 7 上湯原地区の川原湯新駅および周辺利用者の安全確保としての落石防止対策について
- 8 八ッ場ダムが、天明規模の浅間山噴火の際に防災上、役に立つとした根拠について（軽石噴火に伴う噴出量・土石流 / 泥流量・活動履歴から見たダムの存在リスク）
- 9 八ッ場ダム建設に伴う長野原町の土砂災害・被害想定。地震（例えば、昭和6年の北埼玉地震による吾妻溪谷の土砂災害）や火山噴火が伴った場合の流域自治体の被害想定と防災対策をお答えください
- 10 想定される土砂災害が発生した場合、ダム事業の全面中止とダム堤撤去。長年ダム事業で翻弄されてきた長野原町民の皆様が望む美しい吾妻溪谷へ必ず戻すこと（地元の中小土木関係事業者の方々らの手による復旧・復興事業）を確約しますか。
あわせて、事前に指摘された災害関係資料と問題点を知りながら無視し、十分な対策を取らずに事業推進を勧めた官僚の処分・有識者委員の交代や罷免を確約しますか。

【要旨】2012年 9月 日本火山学会 御代田町 行政災害—八ッ場ダム検証に見る国交省河川部門の不正報告（Ⅱ）

竹本 弘 幸 (拓殖大学)

“Administrative disaster” About the fraud report of the Yanba dam verification
by the Ministry of Land, infrastructure and Transport river section , part (Ⅱ)

Hiroyuki TAKEMOTO (Takushoku University)

I はじめに

八ッ場ダム建設問題で実施された国交省・関東地方整備局の検証報告には、建設に不都合な資料を意図的に排除する情報操作が行われていた（大熊, 2011; 竹本, 2011; 2012）。河川の有識者会議は、この指摘と事実を知らながら検証もせず放置し、建設推進の意見書を政府に報告した。

本発表では、八ッ場ダム建設に伴う**応桑岩屑なだれ堆積物 (OkDA)** が引き起こす災害の想定を述べ、官僚が行政の裁量権を逸脱してダム推進の有識者会議を利用してずさんな検証を行っていたことを明らかにする。また、長野原町民が、罹災時に「想定外」という不利益を被ることなく生活基盤が完全保障されるよう、安全面を軽視してダム推進を導いた河川官僚・有識者会議座長の責任の所在を明らかにしておきたい。

II 八ッ場ダムに伴う吾妻渓谷の被害想定

吾妻渓谷の OkDA 分布地では、進行中と停止した古い地すべり、ブロック崩壊や深層崩壊の爪痕が各所で確認できた。これは、熱水変質地帯（小倉～八ッ場）へ瞬時に堆積した OkDA（層厚 50m 以上）の特性・不透水層の形成・地下水など水の挙動が関与した現象である（竹本, 2011）。

OkDA は、火砕岩・降下物・湖成層など粒度組成が異なるメガブロックの集合体で構成された凝集力の乏しい堆積物であるため、飽和重量も様々に異なるものである。しかし、安全解析の水浸変形実験（20cm 立方体を飽和させた変形率を 20m ブロック換算）では、ほとんど変形しないため安全という結論を導いている。これは、試料採取そのものが恣意的だった可能性が高い。

ダム湖面に接する OkDA 分布地（林/上湯原/川原畑/打越/横壁/小倉など）の湛水後の被害進行は、水位を上下することで膨張と収縮・凍結と融解を繰り返し起こし⇒剥落と土砂流亡⇒柱状崩落や谷頭状ブロック崩壊（湖面津波）へとつながるだろう。さらに、OkDA で埋積された旧谷壁斜面（接地面）の間の地下水位を度々上下させることや地震動が伴えば、地すべりや深層崩壊が発生するだろう。事態の深刻化は、町民の生活基盤そのものを奪う可能性が高い。また、新駅裏の金華山（落差 300m の断崖）からの落石は、上湯原全域をカバーしており、地すべりと共に駅利用者の安全確保が課題である。しかし国・県・JR は対策をほとんど考慮していない。

III ダム堆砂量の数字操作と運用・報告不正

ダム堆砂量は、ダムの利水・治水・防災上の有効性を左右する重要な要素であるが、八ッ場ダムの場合 100 年で 1750 万 t と想定し、ダムは 6 千万～1 億 t が運用可能としている。しかし、その試算には活火山の浅間・草津白根山が活動しないことを前提に、吾妻川への土砂供給量が少ない草津側支流 2 つの砂防ダムの堆砂量を流域基準とし、最大の土砂供給源：浅間側のデータ・過去の中小噴火実績を全て排除していた。

3. 11. を受け、防災面を指摘されると天明の泥流量が約 1 億 t であることを理由に対処可能とする一方で、砂防予算 7 億円を計上した。しかし、推計 1 k m^3 以上の天明の降下軽石・吾妻溪谷の地すべりと崩壊土石量・押さえ盛土量（＝総計 1 億 t 以上）など、運用実績に影響する土砂データも全て排除していた。3. 11. タスクフォース報告の主旨「複合災害の視点」を無視して、八ッ場ダムが利水・治水・防災上の全てに役立つと結論付け、聴取した「研究者の権威」を形だけ利用し、関係住民には形式的パブリックコメントセレモニーを行い、前政権のダム推進の方針を情報操作で吞ませたのが実態だろう。

IV 地すべり偽装の実態と関連学会の役割

上湯原地区は、国と県が 3 つの地質断面を公表している。いずれもこの地区が過去に地すべりを起こしたことを裏付けるものである。独) 防災科研でも指定され、現地調査でも分裂低下した 0kDA の堆積面高度は様々に異なる。裂谷内は水に乏しく、尾根状地形の先端崖から多数の湧水が確認できるなど 0kDA に伴う巨大地すべりであることが裏付けられた（竹本, 2011）。

しかし、国交省はダムに不都合な地すべり知見を隠蔽するため、蛇行地形⇒崖錐堆積物と見解を変遷させ、新たに指摘された地学的知見まで排除して、住民と利用者の安全を軽視するなど、公僕として公的責任を果たす意思は存在しない。

3. 11. を受け、防災計画見直しの必要性が指摘される中、地学関連学会は、各地の大型事業計画に対して地域研究者を総動員し、真摯な検証結果を公表する必要があるのではないだろうか。

【要旨】日本地理学会 秋季学術大会 2013 年 9 月 28 日 福島大学

「行政災害」—八ッ場ダム検証に見る国交省河川部門の不正報告(Ⅲ)

“Administrative disaster” About the fraud report of the Yanba dam verification by the Ministry of Land, Infrastructure and Transport river section, part (Ⅲ)

竹本 弘幸 (拓殖大)

Hiroyuki TAKEMOTO (Takushoku University)

キーワード: 八ッ場ダム検証, 情報操作, 隠蔽, 捏造図, 地すべり, 不正報告

Key words: Verification of Yanba dam, information control, concealment, fabrication chart, landslide, fraud report

I はじめに

八ッ場ダム建設関連で実施された利根川・江戸川河川整備計画の報告は、不都合な資料を意図的に排除する情報操作や 3.11. タスクフォース報告の主旨「複合災害の視点」を無視して短期間で作成された。有識者会議座長及びダム推進の各委員（日本学術会議部門委員・群馬大委員）は、捏造や情報操作した資料を容認し、河川官僚（泊 宏氏）らは、行政の裁量権を逸脱し、不正な報告に基づく意見取りまとめを行っていた（竹本, 2012 他）。本発表では、吾妻川流域住民がダム災害の罹災時に生活基盤が完全保障されるよう公正な検証を怠った関

東地方整備局・有識者会議座長と利用者の安全を軽視した JR 東日本上越工事事務所の責任を明らかにしておきたい。

II 吾妻溪谷の OkDA に見る災害事例と履歴

吾妻溪谷では、連続雨量 120mm を超えると JR・国道を通行止めにする。これは、応桑岩屑なだれ堆積物 (OkDA) に伴う土砂災害や土石流の危険が高まるからである。昭和 6 年西埼玉地震の際には地震動によって山崩れ 200 箇所、石垣崩壊 50 箇所が発生し、OkDA が凝集力の乏しい地層であることを裏付けている (熊谷測候所, 1932)。この土石を水で飽和させ振動を与えれば、住民の生活基盤を奪う災害を引き起こし、ダム の埋積が急速に進むことは自明である。現在の吾妻溪谷で地すべりや崩壊が減少した理由は、水で飽和すると崩れやすい OkDA の基底よりも吾妻川が深く谷を刻み「水切り状態にしたこと」で地盤が安定したのである。この逆となるダムを造れば、災害が頻発することは必然である。

①八ッ場沢トンネルの変形：OkDA 直下に掘削した天板が酸性の地下水を貯留するダムの役割を果たし、OkDA が飽和状態となった。この結果、接合部からは炭酸カルシウムの析出が著しく、度々修復を行なっている。また、車両や隣接する吾妻線の振動で、本体にも縦横に亀裂が生じるなど、OkDA の不安定化によるトンネルの変形が確認できた。

②湖面 3 号橋脇：付帯工事現場の崩壊と防災：掘削された工事穴は、一時的に水が貯留された結果、OkDA の崩壊が発生し、導水パイプと擁壁を設けて崩落の進行を止めている。隣接の斜面林は、降雨の影響で崩れ落ちた状態にある。また、林地区南の断崖には、OkDA のブロック崩壊痕地が数多く、湛水後には同様の被害が想定される。事態の深刻化は、林地区全体で大規模な崩壊が発生するだろう。

湖面 2 号橋脇の「道の駅」は OkDA の深層崩壊地の崖際にあり、崩壊を免れた残存部の安全確保は、必要不可欠であるが防災工事は実施されていない。

③JR 川原湯新駅の土砂災害 (安全軽視の実態) 上湯原の応桑層 (OkDA) は地すべりで分裂低下し、堆積面は山側へ逆傾斜している。これで生じた凹地には崖錐堆積物や土石なだれの堆積物、古墳時代以降の土石流堆積物が観察できた。これらは、地すべりが発生し土砂災害が頻発したことを裏付ける証拠であり、国が「地すべりを全面否定した最終見解」が全くの偽りだったことを示すものである。この情報を伝えた JR 東日本は、国交省と一体の考えで防災対策を十分に考慮せず新駅建設を進めるなど利用者の安全を最優先で考える対応を取っていない。OkDA の地すべりは、発生と同時に「山津波となって上湯原全域を襲った」事実を示すものであり、ダム建設がもたらす最悪の被害想定として再度指摘しておきたい。

III ダム堆砂量試算の情報操作と不正実態

ダム堆砂量は、利水・治水・防災上の有効性を左右する重要な要素であるが、八ッ場ダムの場合 100 年で 1750 万 t と想定し、6 千万-1 億 t が運用可能としている。しかし、運用中に浅間 (300-800 年)、草津白根 (1000 年) の大噴火が想定で入るにもかかわらず、活動しない前提で試算をしていた。また、堆砂量を左右するウォッシュロード効果の実績では、同一条件下にある霧積ダムの計画比堆砂量は、196 m³/km²/年に対して 716.6 m³/km²/年と実績は 3 倍もの開きが認

められた。一方、流域面積が同ダムの 33 倍ある八ッ場ダムの計画比堆砂量は、土砂供給量が少ない草津側支流 2 つの砂防ダムの堆砂量を吾妻川全体の基準とし、最大の土砂供給源：浅間側のデータ・過去の噴火実績を全て排除するなどして 245 m³/km²/年と試算するなど不正な試算を行っていた。

IV 「行政科学」が引き起こす災害と住民のリスク

吾妻溪谷は、適度な土砂流出で町民を守る天然の砂防機能を持っていたが、ダムの存在が噴火の際に高い罹災リスク与える結果となる。湛水すれば、湖面に接する OKDA 各所で崩壊や地すべりを誘発すだろう。ダムに蓄積された土砂は、浅間山噴火の際には中之条～渋川～埼玉へと洪水や土砂災害を拡大化させるだろう。行政が、最新の研究成果を意図的に捻じ曲げて計画を実行すれば、公的機関が組織的に犯罪行為を実行したことと同じである。八ッ場ダム建設は、災害リスクを住民へ新たに負わせることになる。国は、防災上もダムを造らない選択肢しかないことを認識して速やかに住民を救済すべきだろう。